

東大寺

奈良県新公会堂にレンタカーを止めて大仏殿へと向かう



「鴟尾の庭」とある



旧奈良県公会堂の屋根にあった唐招提寺の鴟尾を模したものをモチーフに造園化している







遠方に大仏殿の屋根が見えてくる







右手は大仏殿の屋根、左手は南大門の屋根



南大門の屋根





南大門/国宝/鎌倉時代(1199年)再建









大仏様の特徴/組物の間に遊離尾垂木を使う



大仏様の特徴/垂木に幅広の鼻木を打ちつけ木口を見せない

大仏様の挿肘木





正面に中門が見える





大仏様の特徴/隅は扇垂木である







組物同士は通肘木(とおしひじき)で繋いでいる



挿肘木の先端は木鼻に大仏様の特徴が表れている/挿し肘木と挿し肘木の間は皿斗で支えられている

内部でも挿肘木と貫(6層)が良く分かる



金剛力士像(阿形(あぎょう))/国宝/1203年造立



大仏様の特徴/天井がなく、屋根裏を化粧にしている



軒を支える組物は、大仏様六手先となっている





正面が中門



境内側から見る









参考ホームページ

<http://orion.fken.ise.osaka-sandai.ac.jp/orion/jap/hstj/nara/nandaimon.html>

<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/orion/jap/hstj/nara/todaiji2.html>

中門の上に大仏殿の屋根が見える



手前が中門

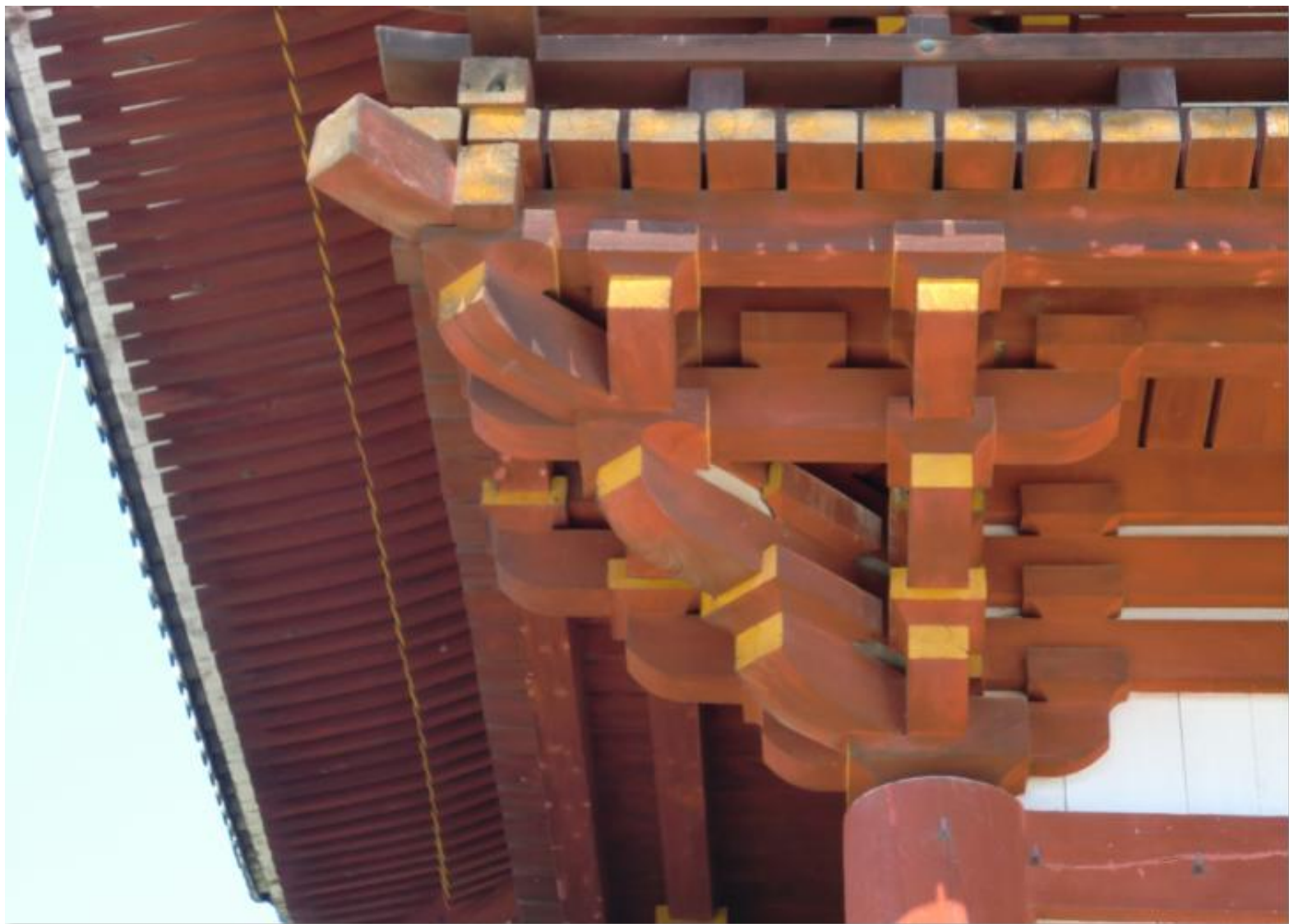


中門/重要文化財/江戸時代中期(1716年頃)再建













持国天



多聞天(兜跋毘沙門天)









廻廊

















大仏殿(金堂)/国宝/江戸時代(1709年)再建





一重裳階付き寄棟造本瓦葺/世界最大の木造建築



↑
金堂正面中央手前に、現存する銅灯笼中、最古の八角灯笼(国宝)が見える







組物は六手先(むてさき)







和様と大仏様の折衷様式/母屋は大仏様、軒天井は和様の小組格天井/江戸時代に流行の唐破風屋根がついている









挿肘木が使われている















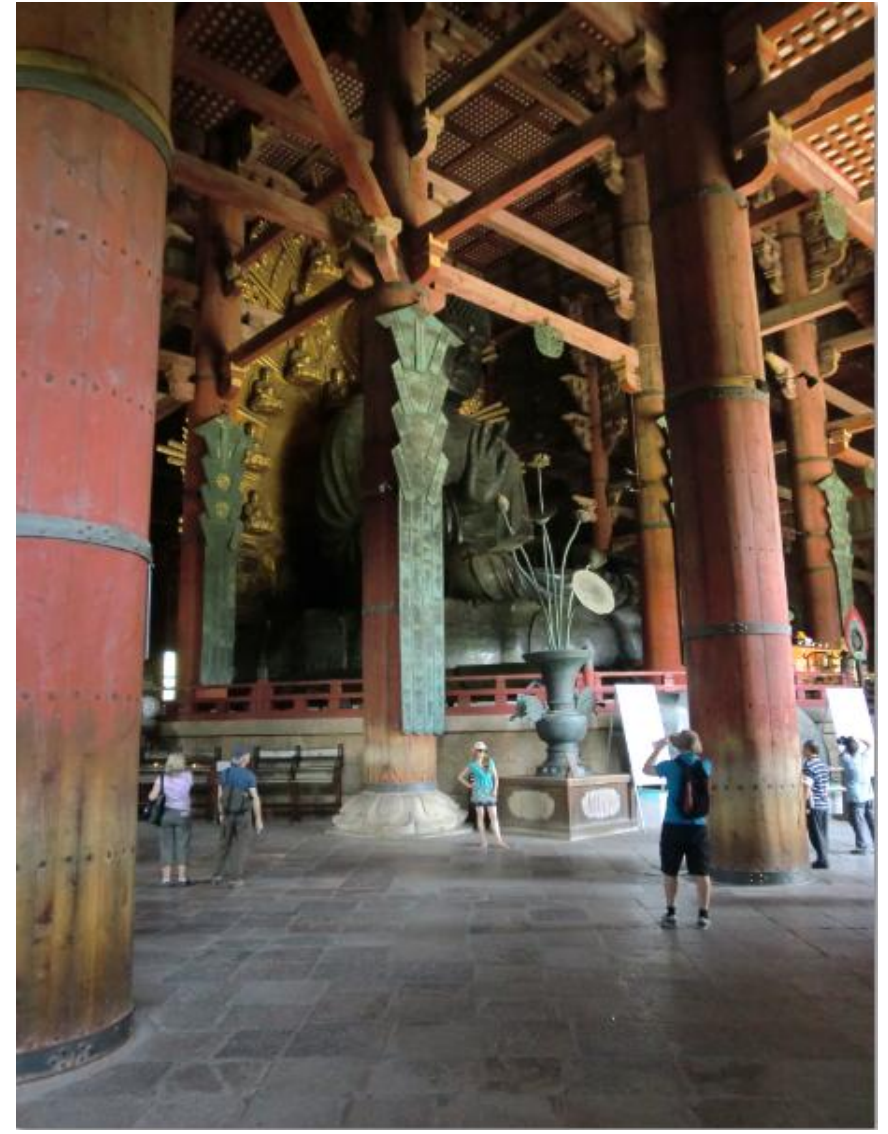
舎那大仏(るしゃなだいぶつ)

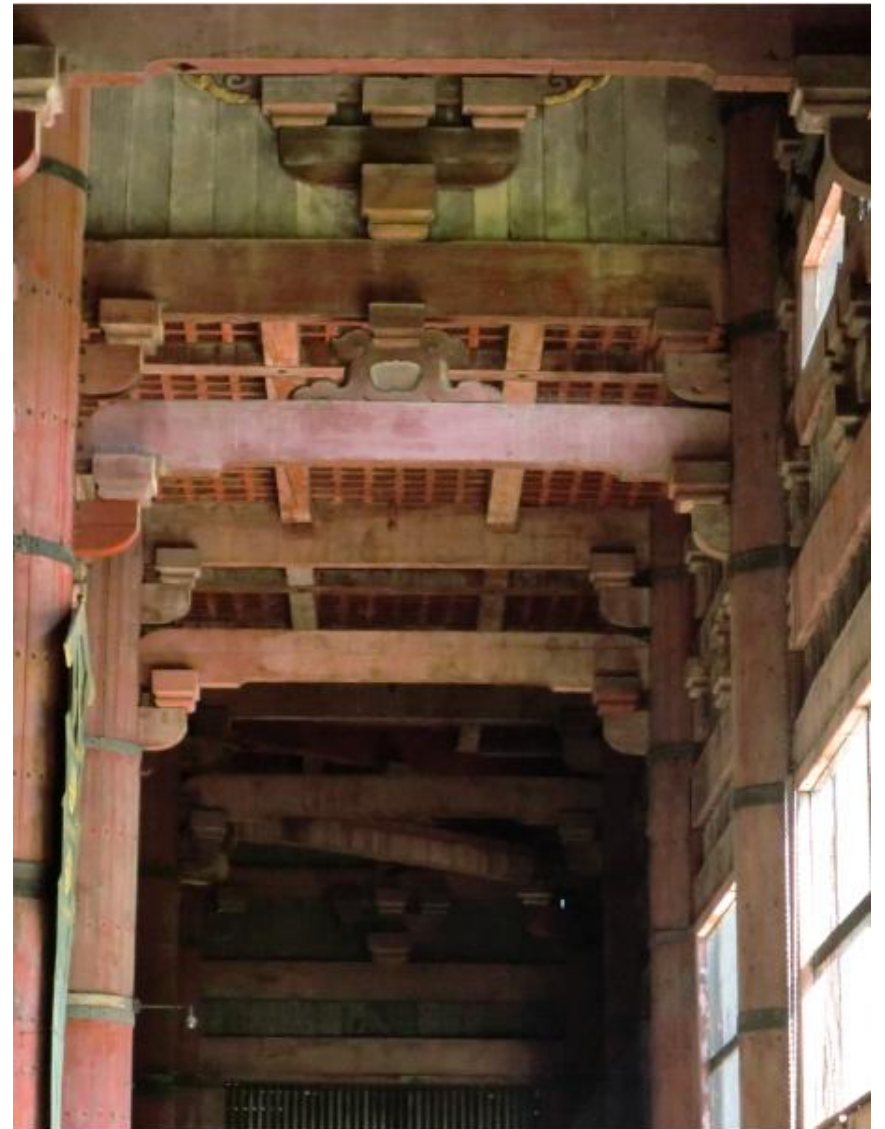


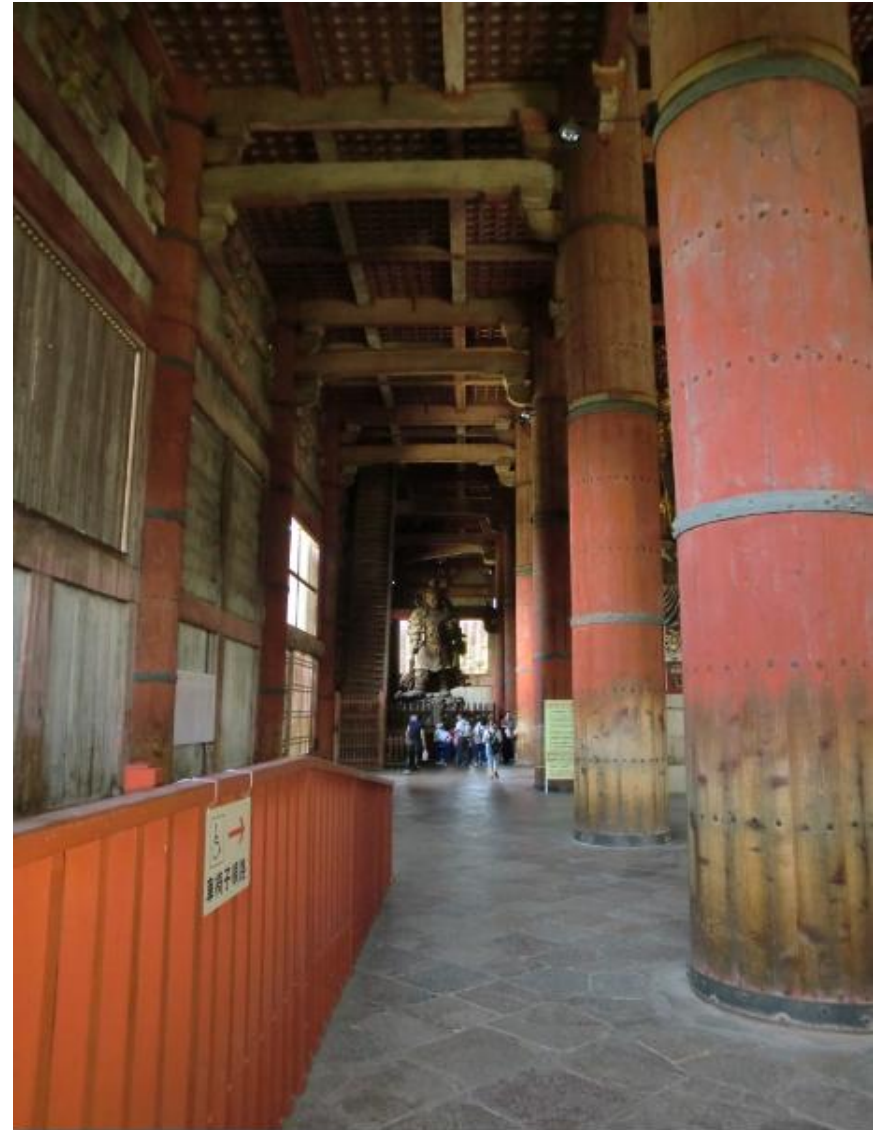
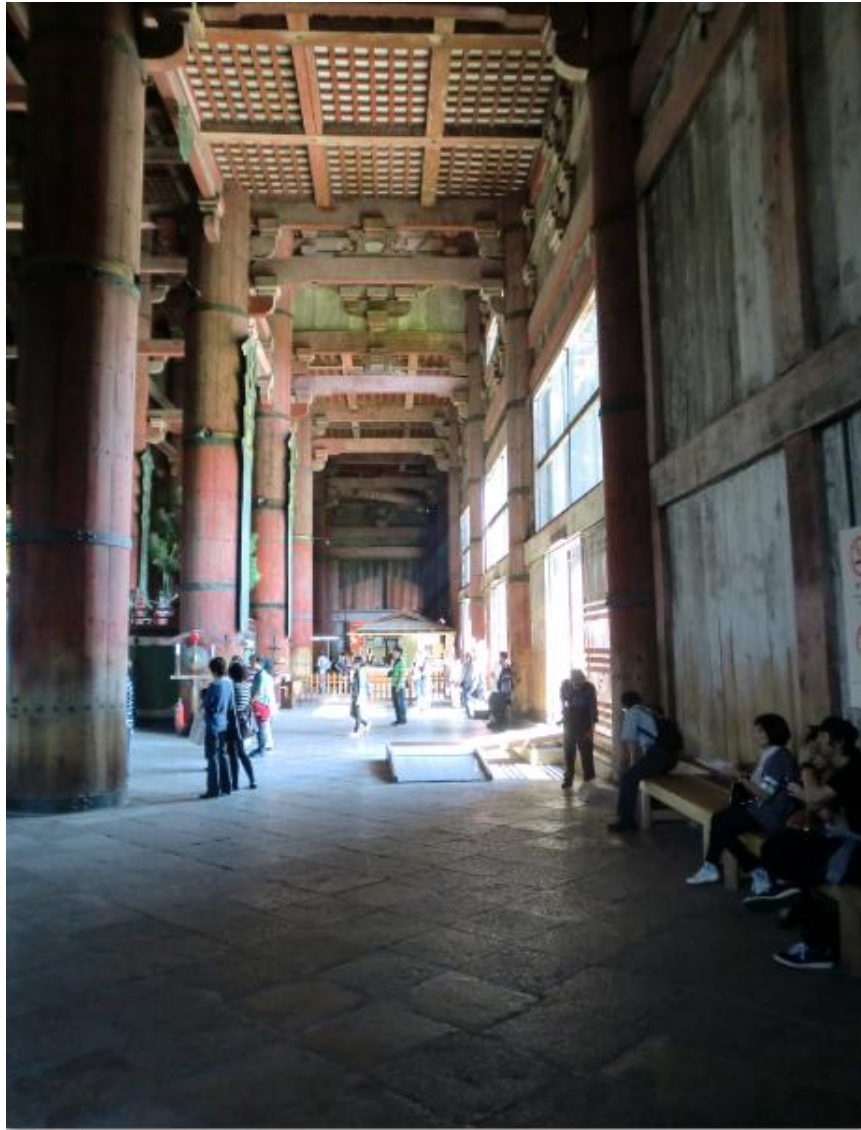












右脇侍の虚空蔵菩薩坐像(江戸時代:重文)



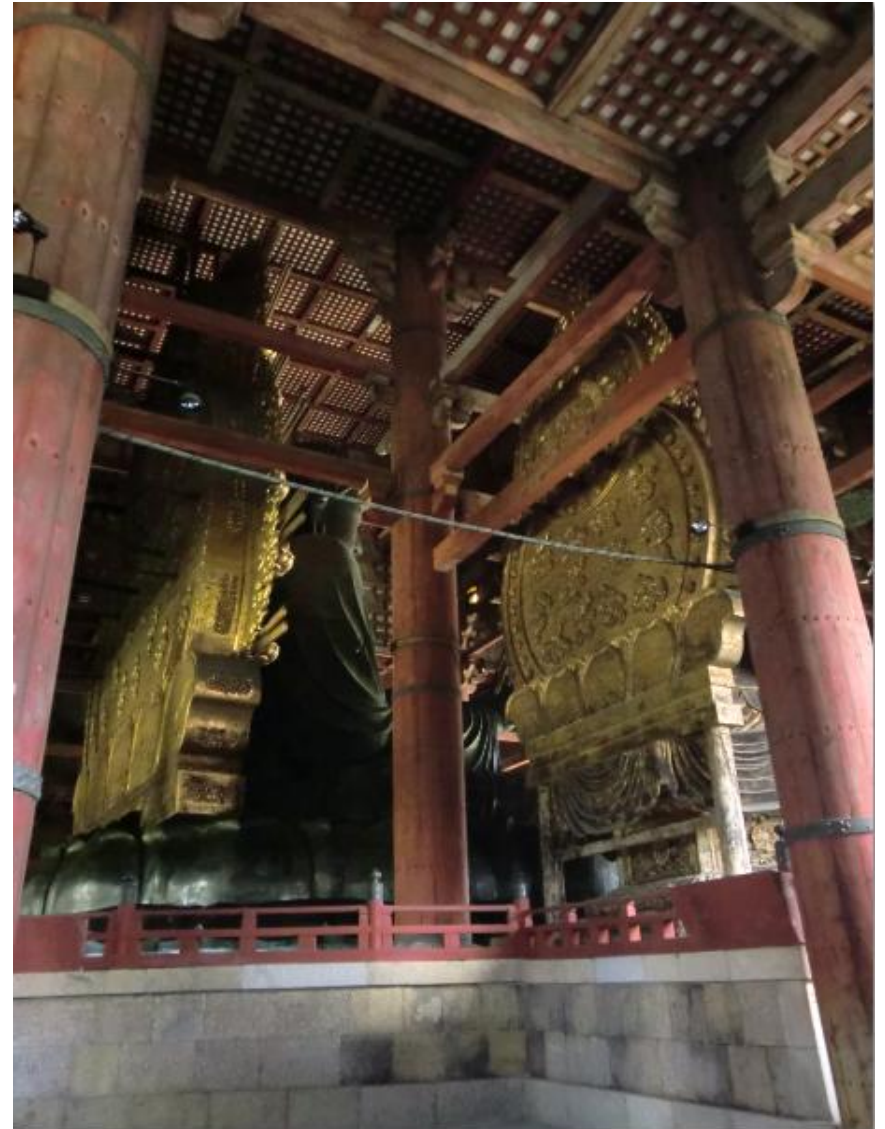
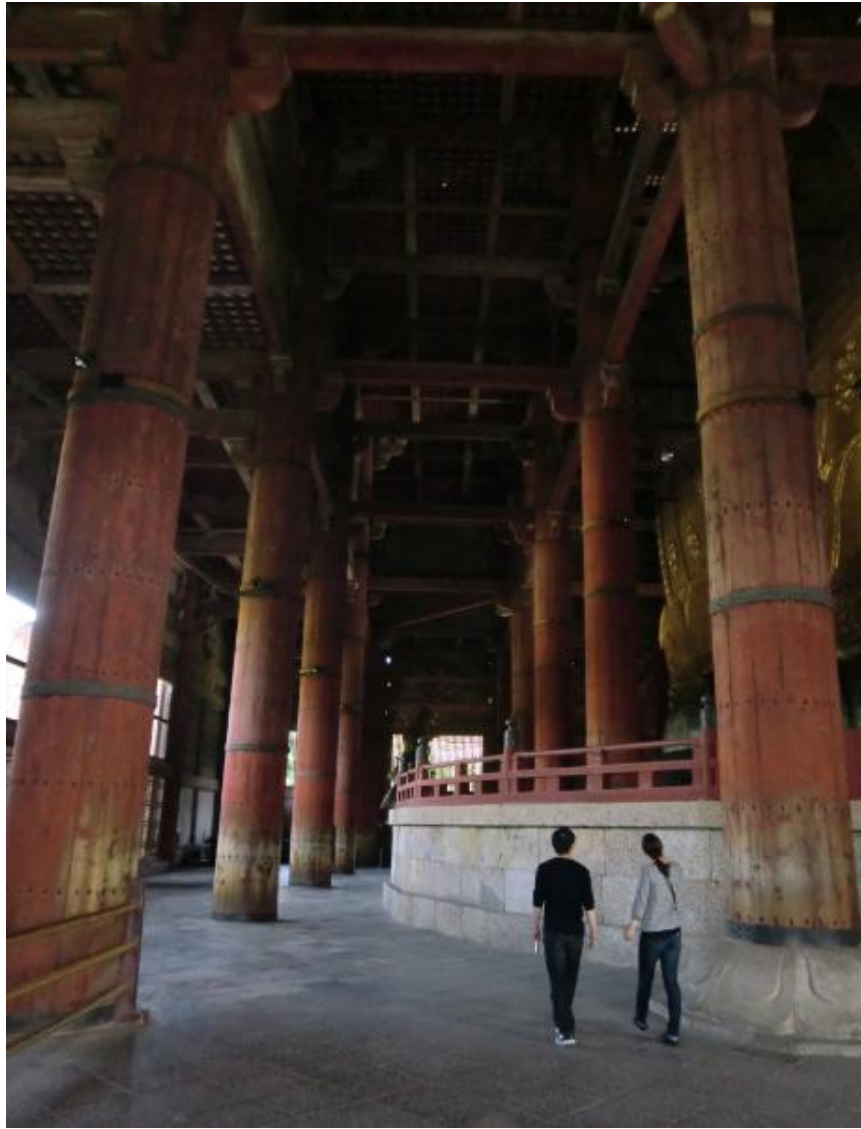
広目天(大仏殿北西隅)



多聞天(大仏殿北東隅)

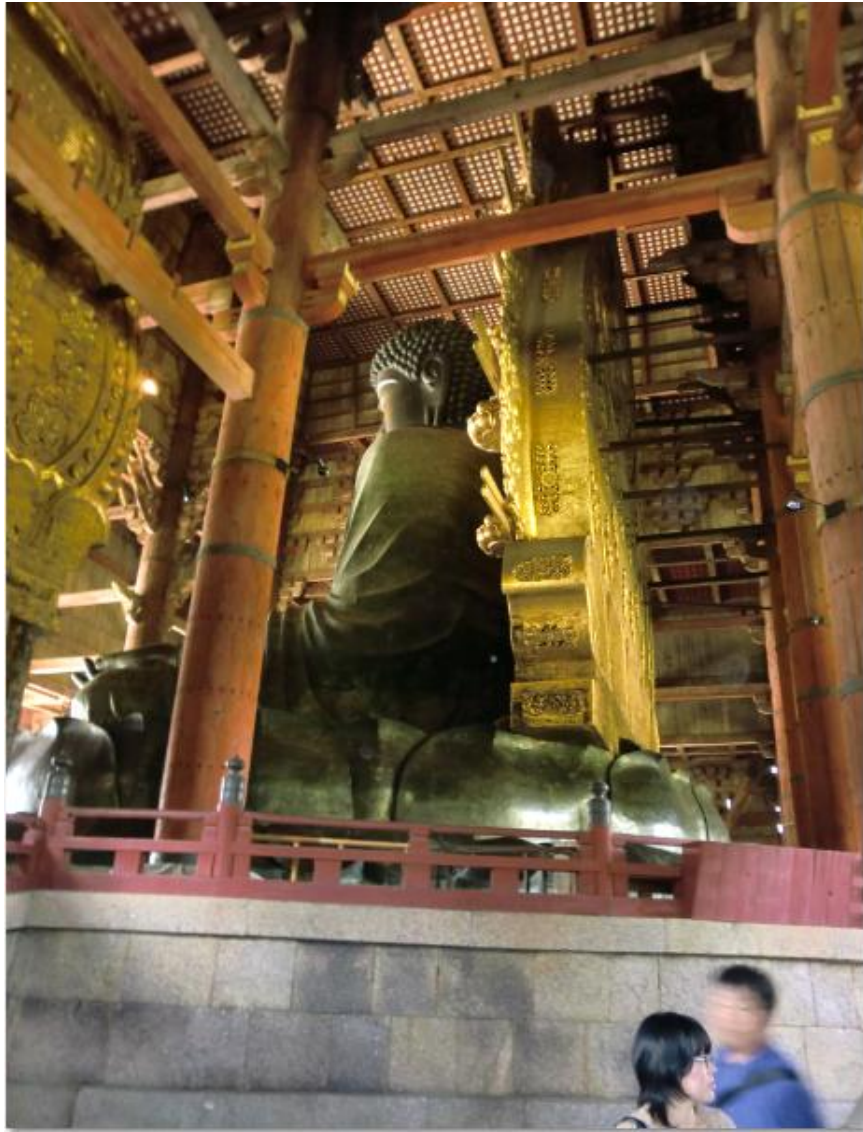












右脇侍の虚空蔵菩薩坐像(江戸時代:重文)



柱は集成材のように、いくつかの木材を組み合わせている/集成材的なこの種の技法の最古の現存例は、中尊寺金色堂(1124年建立)という





参考ホームページ

<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/orion/jap/hstj/nara/todaiji.html>

東大寺大仏殿建地割図(描き起し図)/神戸大学工学部建築史研究室



東大寺大仏殿 建地割図(描き起し図)

東大寺大仏殿 建地割図(描き起し図) 制作：神戸大学工学部建築史研究室

東大寺大仏殿 建地測図

江戸時代 元禄元年(1688) (複製) 縦 3.28m、横 0.98m (複製寸法)

この図は、大仏殿の20分の1の縮尺で、縦横17程からなる日本瓦葺面に準拠で描かれている。現在、複製にされて大仏殿内部の楽堂に掛けられている。おそらく日本最大の紙に描かれた建築設計図(複製設計図のうち立書図、新編図)である。
大仏殿は天平新造時および鎌倉再建時は形行11間であった。江戸再建においても当初計画は形行11間であったが、寛政年間から7間に縮小された。この図は貞享3年(1686、元禄元年と同じ)大仏殿再建の頃に作成された当初計画図と考えられる。偶然によって非常に詳しくなった図面だが、今回赤外線写真などを使用して、読み起こすことに成功した。
形行数等は天平新造時の情報を継承している。形は形行9間の本陣の約律に実際をめぐらし、大正殿(大仏殿)を用い、原形は複製図である。この基本形は縮小された大仏殿に採用されている。ただし、柱の割合は天平新造時とも大仏殿とも異なる建物のものであるし、縮尺も大仏殿と異なる。
大仏殿江戸再建の第一級資料といえるだろう。

大仏殿の規模の比較

	約行	建行	高さ
天平新造	26.3m	50.5m	約40m
江戸再建計画	26.0m	50.4m	約40m
大仏殿	27.0m	50.2m	41.4m(屋根頂上)

(神戸大学工学部建築学研究室 渡田健二)

東大寺大仏殿 建地測図(赤外線写真)



(複製図) 元禄元年計画測図

大佛殿 形行26約律50間丈50寸 高さ約40丈

↑ 実物は右側売店の
上にあります。

天平新造大仏殿

天平新造大仏殿は、大仏殿の再建時に初めて建てられた大仏殿である。大仏殿の再建時に初めて建てられた大仏殿である。大仏殿の再建時に初めて建てられた大仏殿である。



天平新造大仏殿

江戸再建大仏殿

江戸再建大仏殿は、大仏殿の再建時に初めて建てられた大仏殿である。大仏殿の再建時に初めて建てられた大仏殿である。大仏殿の再建時に初めて建てられた大仏殿である。



江戸再建大仏殿

江戸再建大仏殿

江戸再建大仏殿は、大仏殿の再建時に初めて建てられた大仏殿である。大仏殿の再建時に初めて建てられた大仏殿である。大仏殿の再建時に初めて建てられた大仏殿である。



江戸再建大仏殿

江戸再建大仏殿計画図(複製図)

江戸再建大仏殿計画図は、大仏殿の再建時に初めて建てられた大仏殿である。大仏殿の再建時に初めて建てられた大仏殿である。大仏殿の再建時に初めて建てられた大仏殿である。



江戸再建大仏殿計画図

大仏殿の再建計画(複製) 1/20 縦横17程からなる日本瓦葺面に準拠で描かれている。現在、複製にされて大仏殿内部の楽堂に掛けられている。おそらく日本最大の紙に描かれた建築設計図(複製設計図のうち立書図、新編図)である。

東大寺大仏殿 建地割図

江戸時代 元禄元年(1688) (額銘) 頃
縦3.28m、横5.98m (額装含む)

この図は、大仏殿の20分の1の図面で、縦板17枚からなる巨大な画面に墨線で描かれている。現在、額装にされて大仏殿内部の東壁に掛けられている。おそらく日本最大の板に描かれた建地割図(建築設計図のうち立面図、断面図)である。

大仏殿は天平創建時および鎌倉再建時は桁行11間であった。江戸再建においても当初計画は桁行11間であったが、資金不足から7間に縮小された。この図は貞享5年(1688 元禄元年と同じ)大仏殿^{ちよつた}手斧始めの頃に作成された当初計画図と考えられる。風食によって非常に読みにくくなった図面だが、今回赤外線写真などを使用して、描き起こすことに成功した。

桁行総間は天平創建時の規模を踏襲している。形は桁行9間の本体の四周に裳階をめぐらし、天竺様(大仏様)を用い、屋根は寄棟造である。この基本形は縮小されつつも現大仏殿に採用されている。ただし、柱の割り付けは天平創建時とも現大仏殿とも異なる独特のものであるし、細部も現大仏殿と異なる。

大仏殿江戸再建の第一級資料といえるだろう。

られる。
線写真
9間の
屋根は
用され
とも異

保元
元年
計画
画圖



赤丸線写真撮影：野山道郎

天平創建大仏殿

奈良時代、聖武天皇の発願によって建設された創建大仏殿。創建大仏殿の高さについてはいくつかの説があるが、福山氏は諸説のなかでは低めの12丈6尺または13丈6尺(約40m)として重元図を作成している。高い方の説は15丈6尺(約46m)とする。建築様式は和様と考えられる。



(福山敏廣氏復元)

鎌倉再建大仏殿

治承四年(1180)の兵火で創建大仏殿は焼失し、その後重源が大勧進となって、建久六年(1195)に供養された。規模は創建時のものとおよそ同じで、様式は天竺様(大仏様)と考えられている。



(大洞宣氏復元)

江戸再建大仏殿

鎌倉再建大仏殿は永禄十年(1567)に兵火で焼失し、公慶が中心となって再建活動が行われ、宝永六年(1709)に落慶した。様式は天竺様(大仏様)を主とし、江戸時代の様式が細部に遺る。



(現大仏殿 修理工事報告書による)

江戸再建大...



※黄色は、堂内に入った時に見える内部空間をしめす。図中の↑は人間の大きさを示す(身長170cmとして) 作図……下室見弘氏 協力・宮前新葉

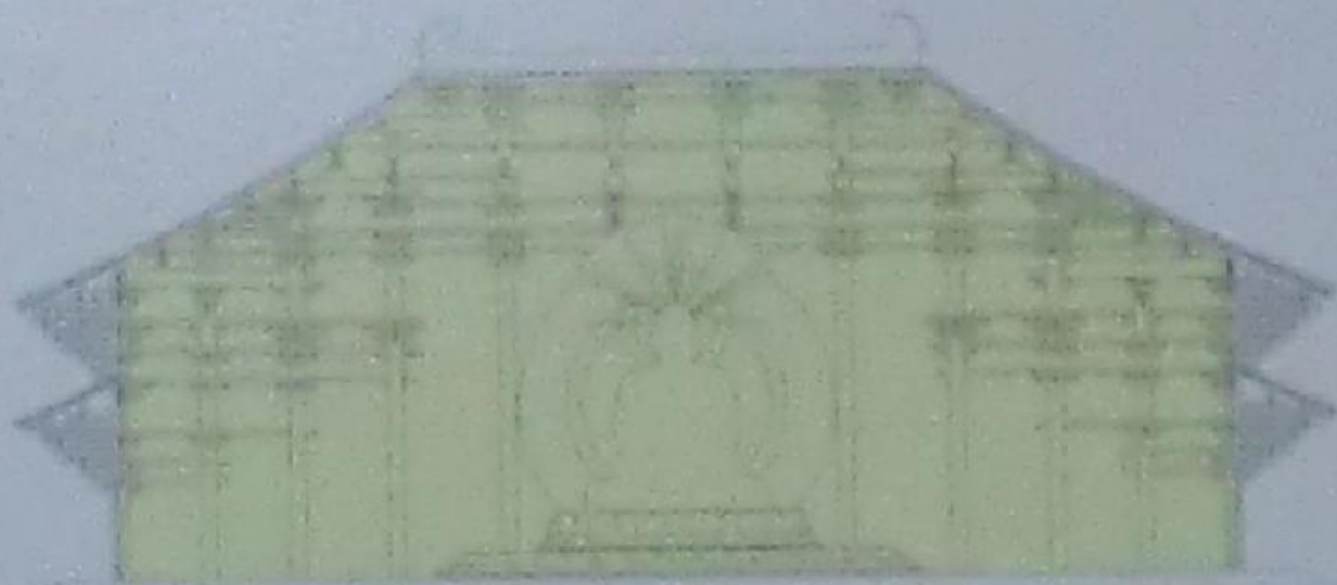
まず)



鎌倉再建大仏殿

鎌倉再建大仏殿

建久三年(1180)の兵火で創建大仏殿は消失し、その後重源が大勧進となって、建久六年(1195)に供養された。規模は創建時のものとおよそ同じで、様式は天竺様(大仏様)と考えられている。



(大岡實氏復元)



創建当初の伽藍の縮小模型





この模型は、創建当初の伽藍の様子を50分の1に縮小・復原したものである。天沼俊一工学博士を中心とする各位が、『東大寺要録』や『正倉院文書』などの古文献を基にして大正年間に制作された。大仏殿は現在のものに比べて東西(左右)に大きく、また100メートルに達する東・西両塔がそびえていたことが分かる。

This is a reconstruction of the original temple area of Todai-ji on the scale of 1 to 50. A group of specialists lead by Shun'ichi Amanuma, a doctor of engineering, made this model during the Taisho period (1912-26) on the basis of old documents including *Todai-ji Yoroku* ("Todai-ji Digest") or *Shoso-in Monjo* ("Shoso-in Archives"). One can see that the Daibutsu-den of those days was wider than the current building and, moreover, that there were two pagodas to the east and west that reached a hundred meter in height.



THE ARCHITECTURE OF THE TEMPLE OF THE GREAT MOUNTAIN, BEIJING, CHINA, IS A REPRESENTATIVE EXAMPLE OF THE ARCHITECTURE OF THE MING DYNASTY. THE TEMPLE WAS BUILT IN 1420 AND IS ONE OF THE MOST IMPORTANT RELIGIOUS SITES IN CHINA. THE ARCHITECTURE IS CHARACTERIZED BY ITS SIMPLICITY AND BEAUTY. THE TEMPLE IS A MUST-SEE FOR VISITORS TO BEIJING.

NO SMOKING
大仙殿
禁煙



鎌倉再建大仏殿の縮小模型



江戸再建大仏殿



鏡池から中門を望む



